

経営比較分析表（平成28年度決算）

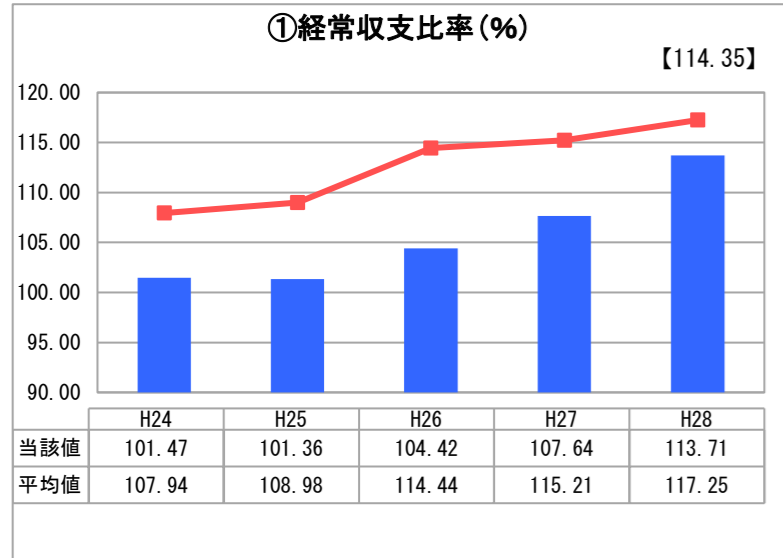
神奈川県

業務名	業種名	事業名	類似団体区分	管理者の情報
法適用	水道事業	末端給水事業	A1	自治体職員
資金不足比率 (%)	自己資本構成比率 (%)	普及率 (%)	1か月20m ³ 当たり家庭料金 (円)	
-	55.78	92.54	2,463	

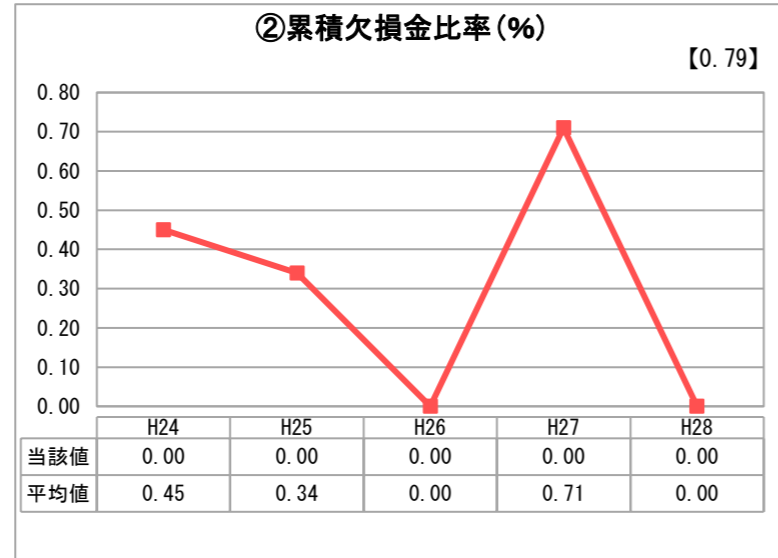
人口 (人)	面積 (km ²)	人口密度 (人/km ²)
9,155,389	2,415.92	3,789.61
現在給水人口 (人)	給水区域面積 (km ²)	給水人口密度 (人/km ²)
2,810,134	808.50	3,475.74

グラフ凡例	
■	当該団体値 (当該値)
—	類似団体平均値 (平均値)
【	平成28年度全国平均

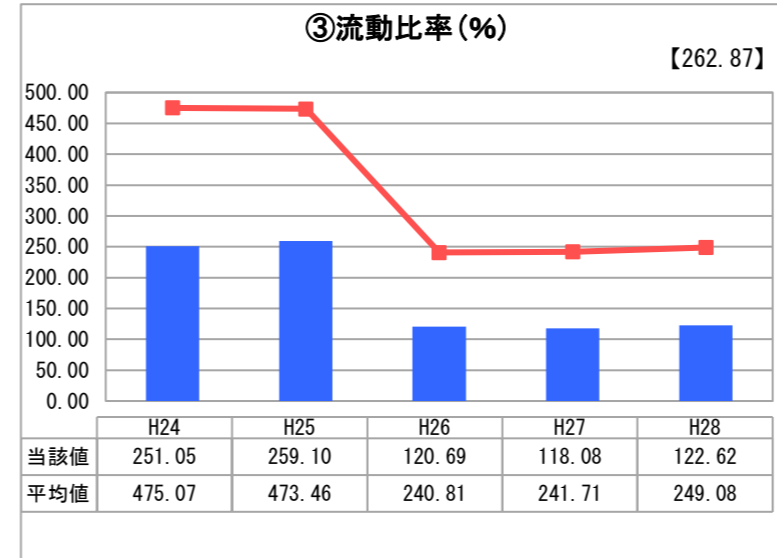
1. 経営の健全性・効率性



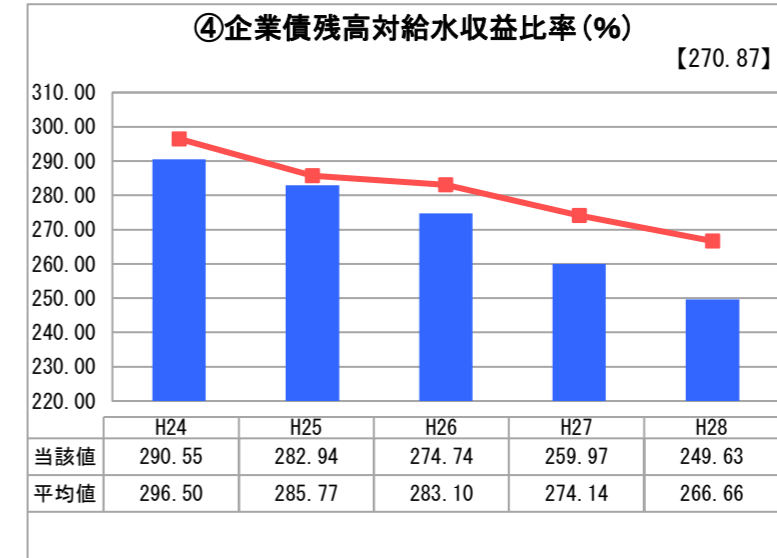
「経常損益」



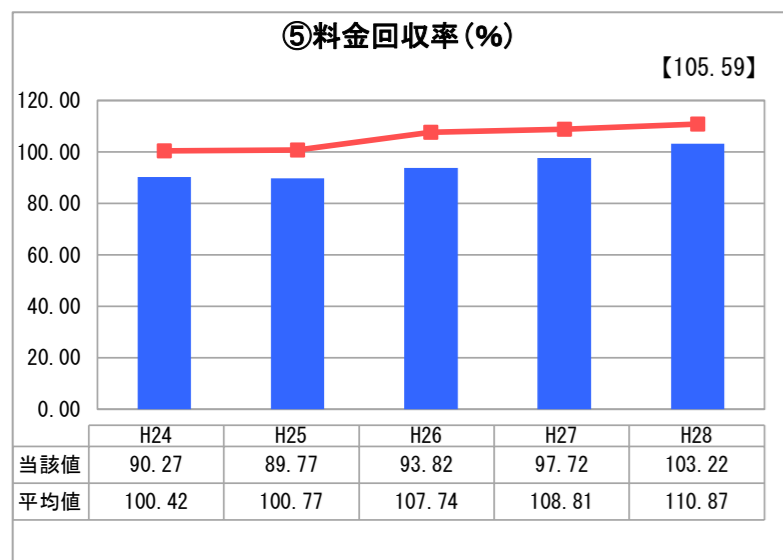
「累積欠損」



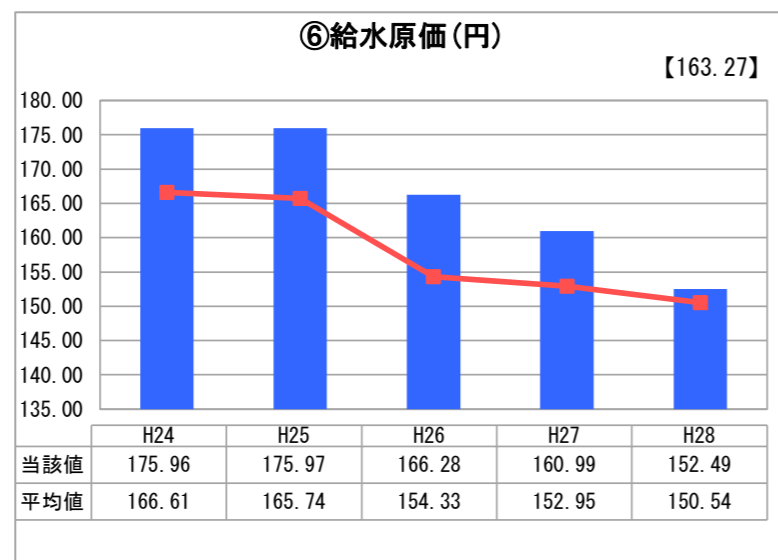
「支払能力」



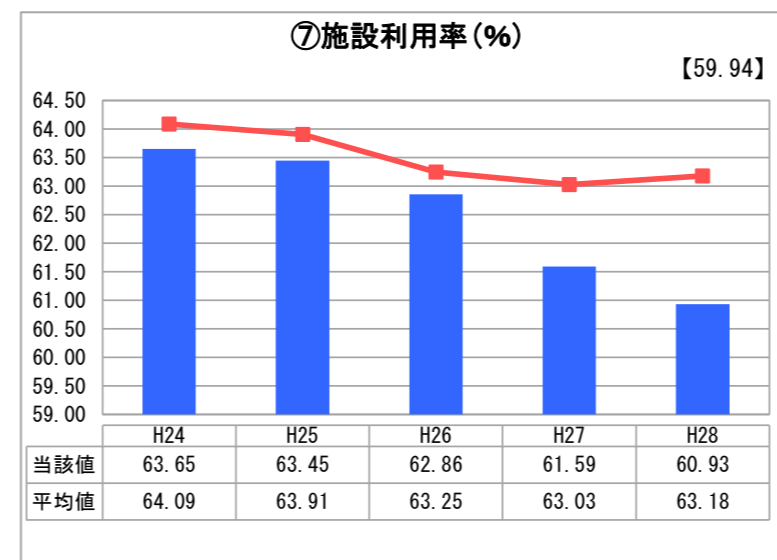
「債務残高」



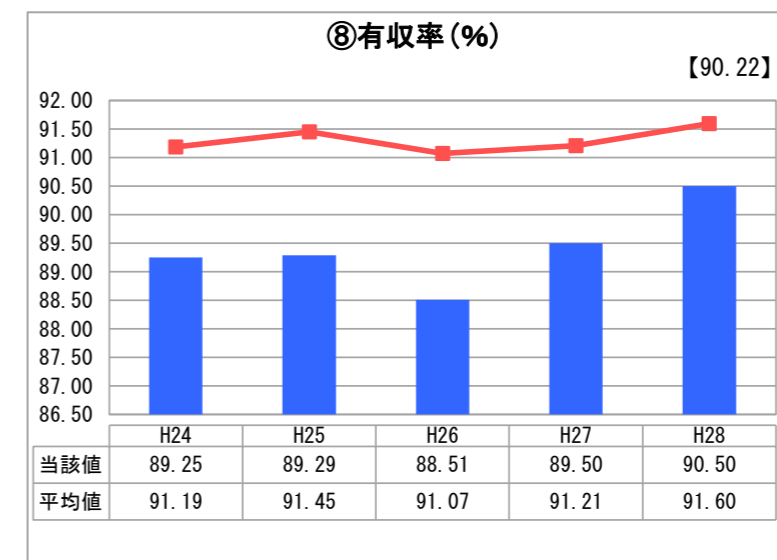
「料金水準の適切性」



「費用の効率性」

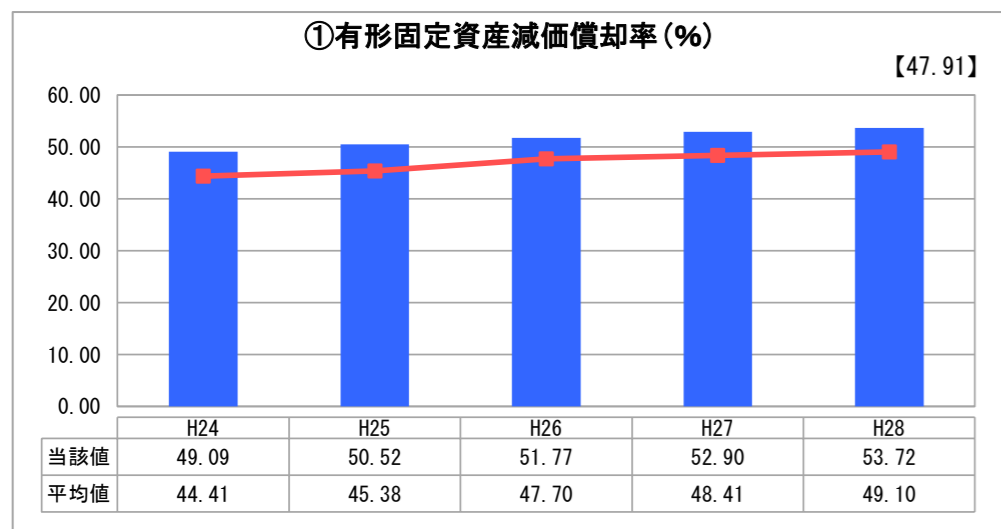


「施設の効率性」

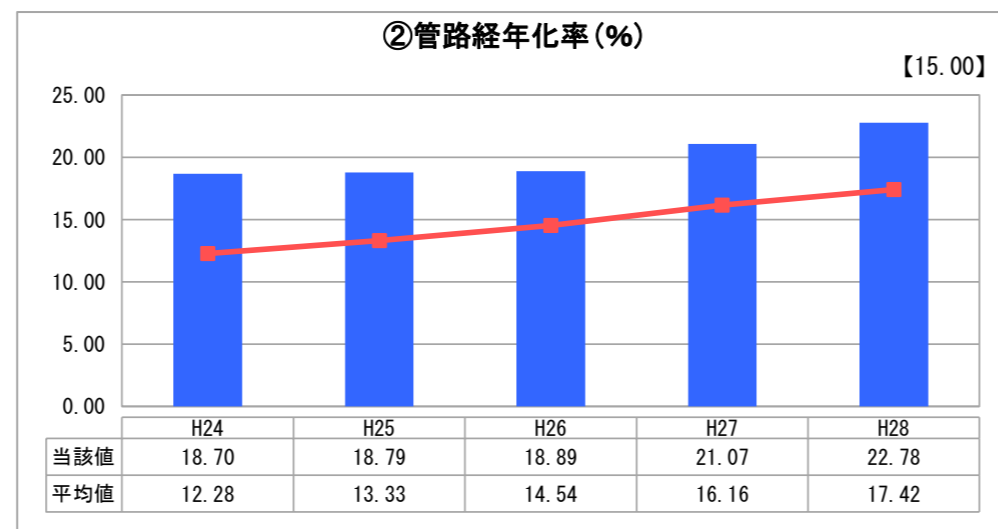


「供給した配水量の効率性」

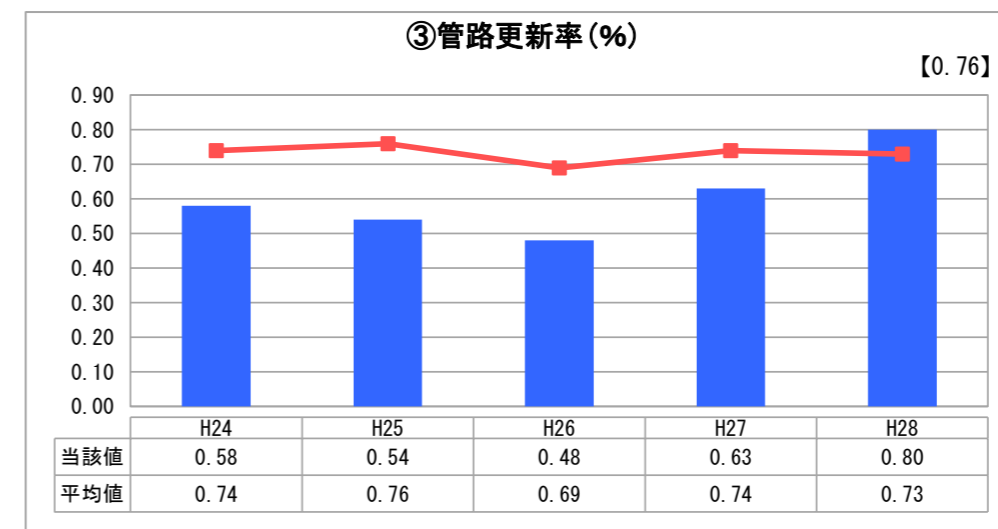
2. 老朽化の状況



「施設全体の減価償却の状況」



「管路の経年化の状況」



「管路の更新投資の実施状況」

1. 経営の健全性・効率性について

「①経常収支比率」は100%を上回り、「②累積欠損金比率」は0%を継続、「③流動比率」についても100%を上回っているなど、黒字による健全経営を維持しているものの、類似団体と比較すると、経常収支比率・流動比率は平均値を下回っている。

「④企業債残高対給水収益比率」は、健全経営に向け企業債残高削減に取り組んできた結果、平均値を下回っている。

「⑤料金回収率」は100%を上回ったが、平均値より低い率となっている。これは、給水費用や老朽施設の更新費用を給水収益だけでなく、水道利用加入金等の付帯収益により補う収入構造にあることによるものである。

「⑥給水原価」は平均値をやや上回っている。これは、神奈川県内広域水道企業団からの浄水受託費相当分が含まれているためであり、これらを除いて算出した給水原価は、平均値を下回る。

「⑦施設利用率」及び「⑧有収率」については、類似団体と概ね同水準の利用や稼働が図られている。「⑦施設利用率」の低下は、送水量の減少によるもの、「⑧有収率」の上昇は、漏水量の減少によるものである。

2. 老朽化の状況について

「①有形固定資産減価償却率」及び「②管路経年率」は、類似団体と同様に上昇傾向にあるが、平均値を上回っている。

この要因は、我が国最初の広域水道として昭和8年に発足して以降、市町村の施設の移管を受けながら給水区域を拡大してきたところであり、近年まで、これらの地域の安定供給を図るために、水量・水圧対策や緊急時におけるバックアップ機能の確保のための、管路整備を優先して行ってきたことによるものである。

管路の更新については、現在、送水管や配水本管などの基幹管路や、災害拠点病院などの重要給水施設への供給管路などから重点的・優先的に実施しているところである。

「③管路更新率」は、平成23年～28年度にかけて整備した湘南東送水管第1号が供用開始したことにより、H28が例年よりも高い率となっている。

全体総括

県営水道の給水区域は、12市6町の広範囲に及び、効率性が発揮しにくい中にあるが、経営の健全性の確保に努めているところである。

今後は人口減などによる水需要の減少が想定される中で、施設の更新に適切に対応していく必要がある。このため、神奈川県営水道事業経営計画〔計画期間：平成26年～30年度〕の中間年である平成28年度に点検を実施し、これまでの主要事業の目標達成状況の評価や、経営計画策定後の経営環境の変化を踏まえながら、平成30年度までの財政収支の見通し、目標達成に向けた対応方法を整理した。

今後も、主要水道施設の更新の本格化に向け、施設の長寿命化などを図りながら、重要度・優先度に応じた計画的な施設更新に継続的に取組んでいく。

※ 平成24年度から平成25年度における各指標の類似団体平均値は、当時の事業数を基に算出していますが、管路経年率及び管路更新率については、平成26年度の事業数を基に類似団体平均値を算出しています。